

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520113

研究課題名（和文）日本近世における視覚文化の美的構造—美的性質の類型論を手がかりに

研究課題名（英文）The Aesthetic Structure of the Early Modern Japanese Visual Culture : Observations Derived from the Typology of Aesthetic Qualities

研究代表者

岸 文和 (KISHI FUMIKAZU)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：30177810

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本近世における美的世界の構造を把握することにある。そのため、一方で、歌麿や広重の画業を手がかりにして、「面白い」「可愛い」という反動的／情緒的性質が、日本の視覚文化で重要な役割を果たしていることを明らかにした。他方で、北斎の画業を手がかりにして、「雅俗二元性」という江戸時代の文化モデル——雅は、品格がある／冷たいのに対して、俗は、卑俗である／暖かい——の妥当性を改めて確認した。

研究成果の概要（英文）：This research project aims at grasping the aesthetic structure of the Japanese visual culture in the early modern era. For this purpose, it demonstrated the importance of such reaction/affective qualities as “*omoshiroshi* (interesting/amusing)” and “*kawayurashi* (lovely/pretty)”, using works and words of Utamaro and Hiroshige as clues. Also, by examining the works and life of Hokusai it confirmed the validity of the model of Edo-period culture, the so-called “binary of *ga* and *zoku*”, in which *ga* is possessed of elegant and refined aesthetic quality, which is regarded cold and impersonal when compared to the vulgarity of *zoku*, which has warmth and human feeling.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：美学・芸術学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美的性質・ヘルメレン・美的用語・視覚文化・雅俗二元論・面白い・可愛い

1. 研究開始当初の背景

従来、「日本の美意識」の研究は、2つの異なったコンテキストにおいて行われてきた。ひとつは、古典的な文学テキストを理解することを目的とする国文学や国語学、あるいは日本文芸学のコンテキストである。時代

を近世にしぼるなら、麻生磯次『笑の研究—日本文学の洒落性と滑稽の発達』、廣末保『もう一つの日本美—前近代の悪と死』、中村幸彦『戯作論』、中野三敏「すい・つう・いき」（秋山虔等編『講座・日本思想・美』所収）、井上隆明『江戸戯作の研究—黄表紙を主として』、河野喜雄『わび・さび・し

おり』、大橋紀子『粹・意気・通と仇——近世の美意識語彙』など、系譜を意識するなら、犬塚旦『王朝美的語詞の研究』、山崎良幸『源氏物語の語義の研究』『「あはれ」と「ものあはれ」の研究』、また通史あるいは文芸学的な観点からするなら、齊藤清衛『批評文学』、高木市之助『日本文学の環境』、岡崎義恵『日本文芸の様式』『美の伝統』、久松潜一『日本文学評論史』、安田章生『日本の芸術論』など、またアンソロジーとしては栗山理一編『日本文学における美の構造』など枚挙に遑がない。

もうひとつは、近代ヨーロッパ美学の見地から日本の近代以前の伝統的な美意識を体系的に論じようとする美学や、ある種の美術史学のコンテクストである。これらは必ずしも近世に特化した研究というわけではないが、大西克禮『美学・下・美的範疇論』『幽玄とあはれ』、九鬼周造『「いき」の構造』『風流に関する一考察』『情緒の系譜』、山本正雄『感性の論理』、そして美術史学の領域では、矢代幸雄『日本美術の特質』、吉村貞司『日本美の特質』、源豊宗『日本美術の流れ』、辻惟雄『日本美術の表情』などがある。しかし従来、これら二つのコンテクストは、それぞれの学問的方法論の独自性のためか、必ずしも有機的・生産的に重なり合い、交差してきたようには思われない。

一方、研究代表者は、平成 17-19 年度科学研究費補助金（基盤研究(c)、研究代表者・岸文和）『絵画行為論——いかにして画像をもって事をなすか』（『絵画行為論——浮世絵のプラグマティクス』、醍醐書房、2008 年）において、画像に備わった一定の美的=感性的性質が、絵師の行為（画像の機能）を特定しうる視覚装置（コード）として働く可能性を認識し、美的性質を構造的に把握する必要性を痛感した。『「山水面白く、また物凄し」——広重日記に見る情緒性』（『美術フォーラム 21』第 16 号、2007 年）と「近世の『面白し』——歌川広重の旅日記を読む」（近畿大学日本文化研究所編『日本文化の鉱脈——茫洋と閃光と』、2008 年）は、そのような関心に基づく研究で、「おもしろし」という用語の意味を、一方では、『源氏物語』など中古の文学テキストの用例（「あはれ」や「をかし」を含む）を参照し、他方では、柳沢淇園の随筆『ひとりね』や十返舎一九の洒落本『東海道中膝栗毛』などといった同時代のテキストの用例と比較することによって、明らかにした。これら二つの研究は、本研究の課題（日本近世における視覚文化の美的構造—美的性質の類型論を手がかりに）が十分に遂行可能であることを確信させるものである。

2. 研究の目的

日本近世の美の世界は多様であり、豊穡である。しかし、その多様さ、豊穡さを真の意味で理解するためには、近世の美的世界の全体を、古代・中世の、そして近代のそれと比較・対照しうる構造的なものとして理解する必要があるだろう。本研究は、このような確信のもとで、江戸時代の文学・随筆・画史・画論において、視覚文化について語るために使用されている語彙のうち、感性の出来事と最も密接に結びついていると思われる美的用語（aesthetic term、「美的概念」（aesthetic concept）とも呼ばれる）——「うつくし」「かわゆらし」「おかし」「めでたし」「あはれ」「おもしろし」「あだ」など——に着目する。そして、分析美学的な枠組みにおいて、それら美的用語の意味を共時的に分析し、また通時的な変化を観察することによって、それらの語彙が表示している美的性質（aesthetic quality）の内実を解明し、さらには、それら個別的な美的性質が相互に取り結んでいる関係・布置を、G. ヘルメレンの「美的性質の類型論」とでも呼ぶべきものを踏まえて整理することによって、近世における美的世界の全体構造を明らかにすることを試みる。これが本研究の目標である。

3. 研究の方法

本研究は、従来行われてきた研究を、分析美学的な枠組みにおいて、重ね合わせ、交差させて、「日本的美意識」についての問題を、美的性質の構造として把握することを試みるものである。具体的には、次の 2 つのことを課題とする。

第 1 に、近世の文学・随筆・画史・画論のテキストにおいて、視覚文化について語るために使用される美的用語、すなわち「うつくし」「うるはし」「かわゆらし」「おかし」「めでたし」「おもしろし」「いやし」「すごし」「すさまじ」「あはれ」「あでやか」「みやび」「いき」「あだ」「すい」など、現象的／第三性質的／価値関与的であることを要件とする「美的性質」を表示する語彙の用例を博捜し、共時的な視点から、それらがどの種の視覚対象に対して適用され、どのような美的=感性的性質を意味しているのかを分析的に記述する。なお、ここで言う「視覚文化」とは、例えば、J. Walker & S. Chaplin, Visual culture: an introduction によれば、「人間の労働と想像力によって生産された物理的な制作物、建造物、図像、そして時間的なメディアやパフォーマンスのうち、美的、象徴的、儀式的、イデオロギー的、政治的な目的をもち、かつ／あるいは実用的機能を果たし、ある程度視覚に訴えるもの」のことである。したがって、広義にとれば、近世の視覚文化には、狩野派・土佐派・南画派・写生派・西

洋画派などが生産に携わったいわゆる「美術」ばかりでなく、浮世絵版画や版本挿絵といった通俗のメディア、また建築、道具、また歌舞伎・能楽、お茶・立花（生花）といった諸芸、さらには衣裳や髪型など、広く生活文化にかかわるものまで含まれる。

第2に、そのようにして確定された個別的な美的性質の内実を、ヘルメレン (G. Hermeren) の「美的性質の類型論」(The Nature of Aesthetic Qualities, 1988; "The Variety of Aesthetic Qualities", Aesthetic Quality and Aesthetic Experience, ed. by M. Mitiyas, 1988) に基づいて整理し、構造的に把握することを試みる。すなわちヘルメレンによれば、美的性質は、対象内在的 (internal) / 対象外在的・反応的 (external/reactional)、字義通り (literal) / 隠喩的 (metaphorical)、記述的 (descriptive) / 評価的 (evaluative)、文化依存的 (culture-dependent) / 文化独立的 (not culture-dependent)、単純・局所的 (simple/local) / 複雑・地域的 (complex/regional) といった基準=次元を設定することによって、6種類——ゲシュタルト的 (gestalt) / 趣味的 (taste) / 自然的 (nature) / 行動的 (behavior) / 心情的・表出的 (emotional) / 情緒的・反応的 (affective) ——に分類されるという。本研究は、この枠組みを、日本近世の美的性質に適用することによって、美的世界の全体を構造化 (美的性質のヒエラルキー・布置を解明) し、古代・中世の、そして近代のそれと比較可能な地平を準備しようとするものである。

4. 研究成果

本研究は、視覚文化について語る美的用語を調査することによって、日本近世における美的世界の全体構造を把握することを課題とする。そのために、大きく分けて、次の2つのことを明らかにした。

第1は、近世の視覚文化において、「面白し」と「かわゆらし」に代表される反応的/情緒的性質——ヘルメレン (G. Hermeren) が分類する美的性質 (Aesthetic Quality) の一種——が、きわめて重要な役割を果たしていることを明らかにしたものである。具体的に言うと、国際美学会 (於北京大学) での口頭発表 "The View of the Mountains Was "Amusing": Surveying the Application of the Japanese Aesthetic Term *Omoshiroshi* to Nature" (2010年8月) は、広重の旅日記に使用された「面白し」という美的用語の3つの意味論的アスペクト (対象的/感情的/媒介的位相) を、広重自身の作品と、広重による北斎作品への言及を参照することによ

って、明らかにすることを試みたものである。また、ポーランド美学会と日本美学会の共同プロジェクトとして開催された第1回国際シンポジウム "Aesthetics and Cultures, The 1st Polish-Japanese Meeting: Exchanging Experiences" での口頭発表 "Aesthetics of *Kawaii*: Through the Analysis of Contemporary Japanese TV Advertisements" は、現代のテレビCMを分析することによって、日本を「代表」する美的性質のひとつとみなされている「かわいい」の共時的意味と通時の変化を逆照射したものである。

第2は、国文学者である中野三敏氏が提唱する「雅俗二元性」という江戸時代の文化モデル——「雅」は、高く評価される、品格のある、上位者のための伝統文化を意味し、「俗」は、低く評価される、通俗的な、下位者のための新興文化を意味する——の妥当性を、浮世絵師の画業と生涯を手がかりにして、改めて検証したことである。具体的に言うと、ワシントン・ナショナル・ギャラリーで行われた国際シンポジウム "The Artist in Edo" での発表 "The Socio-Cultural Identity of the Ukiyo-e Artist" や「手鎖考——浮世絵師の罪と罰」(『否定と肯定の文脈』所収) などは、北斎や歌麿の身分や行動を手がかりに、俗的な視覚文化の担い手であった浮世絵師の社会=文化的な地位を明らかにして、その産物としての浮世絵の俗的性格に照明を当てようとしたものである。また、大邱 (韓国) で行われた韓国民画についてのシンポジウムでの発表「日本近世の花鳥画——雅俗二元的な世界」は、花鳥画というジャンルにおける雅俗二元的構造の具体相を明らかにしたものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計6件)

- ① 岸文和 「北斎の父——御鏡師・中嶋伊勢の系譜」『文化学年報』第62輯、査読なし、2013年、245-261頁
- ② 岸文和 「広告図像の修辞学——歌麿筆〈美人画〉を手がかりに」『経済学論叢』第64巻第4号、査読あり、2013年、1-36頁
- ③ 岸文和 「テレビCMの物語論——スライス・オブ・ライフ型を中心に」『京都美学美術史学』第11号、査読あり、2012年、1-41頁
- ④ 岸文和 「明治28年の写真術——『京名所写真図絵』に見る観光のまなざし」『文化学年報』第61輯、査読なし、2012年、47-66頁
- ⑤ 岸文和 「〈スタンプ狂の時代〉——昭和10年の蒐集熱と観光旅行——」、平成20-23年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 研究成

果報告書『文化遺産としての大衆的イメージ——近代日本における視覚文化の美学美術史学的研究』研究代表者・筑波大学大学院教授金田千秋、査読なし、2012年、207-233頁

⑥岸文和「浮世絵に見る西洋受容——北斎画「富嶽三十六景」の遠近法を中心に」『第5回深圳水墨論壇論文集』深圳画院、査読なし、2010年、191-228頁

〔学会発表〕(計8件)

①岸文和「浮世絵の視覚文化論」、慶州民画フォーラム2013、2013年3月22-23日、於慶州教元ドリームセンター(慶州、韓国)

②岸文和「テレビCMの芸術学——レトリックの視点から」教育プロジェクトI:アート、メディア、テクノロジー、2013年1月29日、於京都工芸繊維大学

③岸文和「日本近世の花鳥画——雅俗二元的な世界」、韓国民画研究所第4回民画セミナー、2012年11月9日、於啓明大学(大邱、韓国)

④ KISHI Fumikazu, “The Socio-Cultural Identity of the Ukiyo-e Artist: Observations Derived from Rewards and Punishments”, The Artist in Edo, Studies in the History of Art, 2012, 4, 14, National Gallery of Art, Washington, USA

⑤ KISHI Fumikazu, “Aesthetics of Kawaii: Through the Analysis of Contemporary Japanese TV Advertisements”, Aesthetics and Cultures. The 1st Polish-Japanese Meeting: Exchanging Experiences, 2011, 5, 24, Jagiellonian University, Cracow, Poland

⑥ KISHI Fumikazu, “The View of the Mountains Was “Amusing”: Surveying the Application of the Japanese Aesthetic Term Omoshiroshi to Nature”, XVIIIth International Congress of Aesthetics in Beijing, 2010, 8, 13, Beijing University, PRC

⑦岸文和「大正イマジユリイの世界——〈趣味〉番付を手がかりに」、大正イマジユリイ学会第20回研究会、2010年7月31日、於同志社大学

⑧岸文和「〈好古家〉としての松浦武四郎——《武四郎涅槃図》と「一畳敷」に見るコレクションの欲望」、第2回「文化遺産としての大衆的イメージ」公開講演会、2010年2月19日、於同志社大学

〔図書〕(計6件)

①岸文和「手鎖考——浮世絵師の罪と罰」、近畿大学日本文化研究所編『否定と肯定の文脈』風媒社、2013年、8-39頁

②岸文和「京都表象のメディア史——名所図

会から写真へ」、同志社大学京都観学研究会編『大学的京都案内』昭和堂、2012年、3-19頁

③岸文和「テレビCMの芸術学——「かわいい」物と人を欲望する」、近畿大学日本文化研究所編『危機における共同性』風媒社、2012年、163-186頁

④岸文和「趣味と蒐集の地勢学——大正14年の《趣味国名所図会》を読む」、近畿大学日本文化研究所編『日本文化の攻と守』風媒社、2011年、44-72頁

⑤岸文和「メディアとしての芸術=環境」、松井利夫・上村博編『芸術環境を育てるために』角川学芸出版、2010年、261-304頁

⑥岸文和「北斎画〈富嶽三十六景〉の制作順序——空間構成を手がかりに」、近畿大学日本文化研究所編『日本文化の中心と周縁』風媒社、2010年、43-61頁

〔その他〕

岸文和「『山水面白し』——自然に適用される美的用語『面白し』について」(KISHI Fumikazu, “The View of the Mountains Was “Amusing”: Surveying the Application of the Japanese Aesthetic Term *Omoshiroshi* to Nature”), 2009-2012年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『日本近世における視覚文化の美的構造——美的性質の類型論を手がかりに』研究代表者・同志社大学文学部教授・岸文和、2013年、1-6(日本語)、1-7(英語)頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸文和 (KISHI FUMIKAZU)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号: 30177810

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: